

## アニメ『ミュウツアの逆襲』と反出生主義

「いるからいる」という誕生肯定との狭間で

水島淳\*

### 1 はじめに

本論文は、近年学術界のみならずインターネット（SNS）上でも話題を集めている「反出生主義」（anti-natalism）という思想<sup>1</sup>が、劇場版ポケットモンスターシリーズの第1作目である『ミュウツアの逆襲』（1998年公開。以下『逆襲』）にも見られるという説の検証から考察を進め、作品の持つ誕生肯定の思想を浮き彫りにすることを目指したものである。

本論文が『逆襲』を考察の中心に置く理由は、大きく分けて3つある。①『逆襲』は、反出生主義が注目される以前の1998年時点で、既に反出生主義につながるセリフを主要キャラクターであるミュウツアに言わせていたこと。②『逆襲』公開時に10歳だった子どもが、2021年現在では33歳前後となっており、今日反出生主義に注目している人々に影響を与えている可能性があること。③『逆襲』は2019年にリメイクされており、今後の世代にも影響を与える可能性があること。以上の3点である。

また本論文は、次のような構成で執筆されている。第2章ではまず、反出生主義とは何かを、森岡正博の見解とデイヴィッド・ベネターの「誕生害悪論」をもとに検討し、本論文内での定義を明確化する。続く第3章及び第4章では、第2章で定義した「反出生主義」を念頭に、『逆襲』及びそのリメイク作品である『ミュウツアの逆襲 EVOLUTION』（2019年公開。以下『逆襲 EV』）と、『逆襲』の続編である『ミュウツア！ 我ハココニ在リ』（以下『我ココ』）のストーリーや重要なセリフを概観し、ミュウツアの思想は反出生主義であるのか否かを検討する。そして第5章では、『逆襲』のもつ「誕生肯定」、「存在肯定」の側面を浮き彫りにし、我々は反出生主義の思想を持つ者とどう関わっていくべきなのか考察する。ここで重要なキーワードとなるのが、「いるからいる」というセリフである。

---

\* 大正大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士）、反出生主義研究会主催者  
電子メール：j\_mizushima[a]svk.jp

<sup>1</sup> 例えば森岡（2020a）などでも反出生主義の流行について紹介されている。

## 2 反出生主義とはなにか

そもそも反出生主義とはどのようなものなのだろうか。たとえばインターネット上で検索すると、以下のような回答にたどり着く。「私は生まれてこないほうがよかった”、“苦しみのあるこの世界に子どもを産まないほうがいい”。そうした考え方のことです」<sup>2</sup>。また森岡正博は自身の **Twitter** において、反出生主義とは「出生に否定的な思想のこと」とした上で次のように分類している。

- ① 「古代ギリシア的な、生まれてこないほうが良かったとの否定的生命観」
- ② 「古代インド的な死後に再び生まれたいことを目指す思想」
- ③ 「21 世紀の子産みは普遍的に悪いとする思想」<sup>3</sup>。

反出生主義とはコレコレのことであるというコンセンサスは現状できていないが、一旦この分類を念頭に置いた上で、次に反出生主義の中でも近年大きな注目を集めているベネターの「誕生害悪論」を見ておこう。ベネターは『生まれてこないほうが良かった』（原著 *Better Never to Have Been*）という直接的タイトルの中、以下のことを述べている。

1. 「存在してしまうこと」は常に（最高の人生だったとしても）「悪」である
2. 人類は生まれてくるべきではない（子作り・出産否定、避妊・中絶推奨）
3. 人類は絶滅すべきだが自死は推奨しない

まず 1 についてベネターの理論を見てみよう。まず「良いことも悪いことも存在している人にのみ生じる」が、両者は「非対称」であるとベネターはしている。「痛み」などの悪いことがないのはそれを享受する人がいなくても「良いこと」であるが、「快樂」などの良いことがないのはそれを剥奪される人がいなかぎり「悪くない」。ここからベネターはこの世界に存在していないことの方が良いと主張するのである<sup>4</sup>。

続いて 2 と 3 についてだが、これは 1 から導出される結論と言える。人類が〈この世界に存在していないことの方が良い〉のであり、その〈良いこと〉を実践していくのであれば、当然新たな生命を生み出すことは禁止されるべきだ

---

<sup>2</sup> 牧内（2020）。

<sup>3</sup> 2021 年 1 月 12 日午前 11 時 10 分のツイート

<https://twitter.com/Sukuitohananka/status/1348814471855185921> より引用（最終アクセス 2021 年 1 月 25 日）。詳細については森岡（2021）も参照。

<sup>4</sup> ベネター（2006=2017）, pp.22-23、p.39.

し、絶滅すべきということになるだろう。ではその積極的実践として人類は自死する道を選べばよいのかというと、ベネターは必ずしもそうではないと述べている。なぜなら「死もまた私たちにとって悪いことである可能性がある」からである<sup>5</sup>。なお自死がもたらす害悪は本人に対するものというよりは、残された人々への害悪と言える<sup>6</sup>。

以上がベネターの「誕生害悪論」の要旨である。この理論は先の森岡の分類で言えば①と③の複合形と見做すこともできる。つまり我々は生まれてこない方がよかつたし、生まない方がよいのである。しかし反出生主義が必ずしもこの「誕生害悪論」のような形をしている訳ではない。つまり森岡の分類の①と②とは切り離された形で③のみが語られる反出生主義もある。例えば Kei Singleton は、「アンチナタリズム(Anti-natalism)とは、子供を作ることを推進する natalism に反対で、「子供を作るべきではない」と考える立場です」。「アンチナタリズムは「生みだすべきでない」であって、「生まれたくなかった」という個人的な嘆きではないのです」としている<sup>7</sup>。

このように反出生主義と一口に言っても多くのバリエーションがあり、その定義は論者によってズレがある。本論文では「反出生主義」を広い意味でとらえ、ギリシア的反出生主義とベネターの誕生害悪論を念頭に、「生まれてこなければよかつた」という嘆きと「誕生させる行為は悪である」という思想を合わせて「反出生主義」と呼ぶこととしたい。

### 3 『逆襲』と反出生主義

次にミュウツーはどのようにこの世に生を受け、反出生主義に接近したのかを、『逆襲』及び『逆襲 EV』から確認していこう。なおセリフなど重要箇所引用は五味 (2019a) <sup>8</sup>からである。

そもそもミュウツーはナチュラルにこの世に生を受けたわけではない。彼<sup>9</sup>はミュウというポケモン<sup>10</sup>のまつ毛の化石から人工的に作られたポケモンなのである。そんなミュウツーは、まだこの世に生を受ける前、つまり培養装置の中にいる頃から自己意識をもっており、「わたしはだれなんだ」<sup>11</sup>と自問している。

---

<sup>5</sup> 同 p.25.

<sup>6</sup> 同 p.227.

<sup>7</sup> Kei (2020)。なお同ブログでは反出生主義と anti - natalism も区別しているが、本論文では無用な混乱を避けるため、そうした区別は行わないこととした。

<sup>8</sup> ページ数に関しては本書に記載がないため転記しないものとする。

<sup>9</sup> 設定上ミュウツーに性別はないとされているが、ここでは便宜的に「彼」と呼ぶ。

<sup>10</sup> 正式にはポケットモンスター。劇中に登場する架空の生物の総称であり、ミュウはその中でも「幻のポケモン」と呼ばれている。

<sup>11</sup> このセリフからもわかるように『逆襲』のメインテーマは「自分とは何か？」であると言わ

そしてある日ついに、ミュウツーは培養装置の中から自らの力が出てくることになる。科学者たちはそのことに歓喜したが、ミュウツーの「わたしはなんのために、生まれてきた」という怒りから研究所を破壊されてしまう<sup>12</sup>。なおそんなミュウツーを騙して手中に収めたロケット団<sup>13</sup>のボスであるサカキは、彼の疑問にこう答えている。

「ポケモンは人間のために使われ、人間のために生きる…。ほかになんの価値がある？」

サカキのこの言葉に激怒したミュウツーは拘束を破壊し、彼の下から逃げ出す。そしてついにミュウツーは反出生主義に近づく思想を吐露する。

「だれが生めと頼んだ」

「だれがつくってくれと願った」

「わたしは…、わたしを生んだすべてを恨む」

「だからこれは、攻撃でも、宣戦布告でもなく、わたしを生み出したおまえたちへの、逆襲だ」

このように人工的につくられたミュウツーは、自身をつくった存在である（映画やマンガの視聴者を含むであろう）「人間」への「逆襲」を決意する。以上が、『逆襲』の序盤のストーリーである。ミュウツーは、先に述べたようにナチュラルに、言い方を変えれば両親の性行為により自然に妊娠、分娩を経て誕生した生命体ではない。それゆえに彼は反出生主義にも通じるセリフを吐露することになったのである。もちろんナチュラルにこの世に生を受けたとしても、筆者を含め「生まれてこなければよかった」という気持ちを持つことはあるだろう。しかしミュウツーの苦悩は、彼が人工的に作られた存在であるという点に集中している。つまり本作は、クローン技術が世界的に脚光を浴びた 1998 年当初の世相<sup>14</sup>に対して、クローンのような人工的に作られた存在がどんな苦悩を持

---

れている。実際脚本を担当した首藤剛志はそう明言している [首藤剛志 (2008)「第 168 回『ミュウツーの逆襲』市村正親氏」「WEB アニメスタイル」

[http://www.style.fm/as/05\\_column/shudo168.shtml](http://www.style.fm/as/05_column/shudo168.shtml) (2020 年 11 月 18 日最終アクセス)。

<sup>12</sup> なお研究員たちの生死は映画及びマンガ内で描かれていないため不明である。

<sup>13</sup> 作中に登場するマフィア組織。

<sup>14</sup> クローン羊のドリーは 1996 年に生まれ、1997 年にその存在が発表され世界的問題になって

つかを知らしめた作品だと言える。この人工的に作られたがゆえの苦しみを吐露したセリフにはほかにも、「わたしは人間につくられた……だが人間でもない。つくられたポケモンのわたしは、ポケモンですらない」<sup>15</sup>というものがある。現実においてクローンに自己意識があるとすれば、こうした悩みを持つ可能性は極めて高いように筆者には感じられる。

さて「逆襲」を志したミュウツーは自身の城を築き、そこに主人公のサトシを含む優秀なポケモントレーナー<sup>16</sup>を集めた。そして彼らの持つポケモンから強力なコピーポケモン（＝クローン）を生み出し、「逆襲」の準備を進める。しかしサトシの活躍により、捕らえられたオリジナルのポケモンたちが解放され、コピーとオリジナルは血みどろの争いを繰り広げることになった。そしてミュウツーの前にも目的は不明だが、自身のオリジナルであるミュウが立ちふさがる<sup>17</sup>。

この戦いにおいて、オリジナルもコピーも、「どちらが本物か」という自身のアイデンティティをかけて戦うことになる。これは特にミュウツーたちコピーにとっては「自分たちは人工的に作られた偽物」という気持ちがある根底にあり、ミュウたちオリジナルからすれば「オリジナルである自分たちこそ本物」という自負心があったと考えられる。つまり彼らは生物の本能として、「強いものが本物」「勝った方が正義」と考えているのであろう<sup>18</sup>。ミュウツー自身、コピーはオリジナルより強く作られたがゆえに「勝たねばならぬ」「弱くってはッ生きられぬのだ」「われらは勝つ…。生き続ける」とミュウに主張している<sup>19</sup>。

そんな本能のままの争いを見た人間たちは、「同じ生き物同士、勝ち負けがあるわけ…？」と困惑する。そんな中サトシは、この「本物を決める戦い」を止めようとするが、彼はミュウツーとミュウが放った光線によって石に変えられてしまう<sup>20</sup>。人間に対して敵意をもつミュウツーはそんなサトシの行動に「人間

---

いる。

<sup>15</sup> マンガ版『逆襲 EV』である五味（2019a）では省略されていたため、小説版『逆襲 EV』である水希（2019）pp.33-34から引用した。

<sup>16</sup> ポケモンをポケモンバトルという競技で戦えるようにすることなどを目的に鍛える人たちの総称。

<sup>17</sup> なお作中では明言されていないが、首藤はミュウがミュウツーと戦うのは自分のコピーという存在が許せないからだとしている [首藤剛志 2008「第 167 回ポケモン事件前までの『ミュウツーの逆襲』」WEB アニメスタイル] [http://www.style.fm/as/05\\_column/shudo167.shtml](http://www.style.fm/as/05_column/shudo167.shtml) (2020 年 11 月 18 日最終アクセス)。

<sup>18</sup> 作中でも、「生物は同種の生物に縄張りを譲らない」ことが語られている。

<sup>19</sup> なおこの主張は『逆襲』や映画版『逆襲 EV』にはないマンガオリジナルのものである。

<sup>20</sup> この表現は子ども向けになるべくマイルドにしたものと考えられるが、おそらくサトシの「死」を描こうとしたものと思われる。

が我々の戦いを止めようとした？」と驚愕している<sup>21</sup>。そして静まり返った戦場で、ピカチュウはサトシを目覚めさせようと得意の電撃を彼に放つ。しかし石になった彼は反応しない。それでもピカチュウは何度も電撃を放つ。やがてピカチュウの目からは涙がこぼれ、それを見た他のポケモンたちもオリジナル、コピーの違いなく涙を流すのだった<sup>22</sup>。その涙が奇跡を起こし、サトシの石化は解除される。その様子を見てなにかを悟ったミュウツーは、自身に関する記憶をサトシたちの脳内から消し、どこかへと去っていった。彼は言う。

「我々は生まれた。生きている…、生き続ける」

この時点でミュウツーが反出生主義に近い思想を捨て去ったか否かは定かではないが、少なくともサトシの行動を見て、人間に「逆襲」する必要はなく、また生きていくためにオリジナルより強いことを証明する必要もないことを悟ったようである。

なお記憶を失ったサトシたちはなぜここにいるのか？ と疑問を抱くことになるのだが、その疑問にヒロインのカスミは「いるんだからいるんでしょうね」（以下「いるからいる」）と答えている。これが、ミュウツーが提示した本作の問いの1つである、〈自分は何のために生まれ、なぜここにいるのか〉への答えであるとされている<sup>23</sup>。

#### 4 ミュウツーは反出生主義に至ったのか

結局のところ『逆襲』および『逆襲 EV』の内容を見る限りでは、ミュウツーの反出生主義に近いセリフはあったものの、ベネターの「誕生害悪論」のような「反出生主義」思想に彼が至ったとする決定的根拠があるとまでは言い難い。

---

<sup>21</sup> マンガ版である五味（2019a）ではさらに「あの人間が…」というセリフが追加されており、ミュウツーの人間に対する不信感がより強く描かれている。

<sup>22</sup> この場で泣いていないのはミュウツーとミュウ、そして「人間」である。劇場公開時にはカットされたシーンが追加されている『ミュウツーの逆襲 完全版』では、〈悲しくて涙を流すのは人間だけ〉という意味深なセリフが映画序盤に追加されており、そのセリフが出てくるシーンではミュウツーも涙を流している。そのことを踏まえて考えると、この時点でミュウツーやミュウ、そして「人間」までもが純粋な人間の心を失っているのに対し、ポケモンは「本来の人間」と同じような心をもっていることを意味しているのかもしれない。このことについて本論文では詳しく触れることはできないため、別稿でより詳細に検討してみたい。

<sup>23</sup> このカスミのセリフと、ロケット団のムサシたちが述べた（ここにはなにもないけど）「きれいさっぱり、いいかんじ〜！」という2つを以って、首藤は「自分とは何か？」に対して自分（首藤）が出せる答えであるとしている〔首藤剛志 2008「第168回『ミュウツーの逆襲』市村正親氏」「WEB アニメスタイル」[http://www.style.fm/as/05\\_column/shudo168.shtml](http://www.style.fm/as/05_column/shudo168.shtml)（2020年11月18日最終アクセス）〕。

また「生まれてこなければよかった」と嘆きながら自分と同じコピーポケモンをつくるというある種矛盾した行いもしており、「誕生させる行為は悪である」という意味での「反出生主義」もそこには見られない<sup>24</sup>。そこでここではさらに、ミュウツウの思想はその後どうなったのかを、公式な続編である『我ココ』から追いかけてつ、彼の思想が「反出生主義」と言えるのかさらに検討していきたい。なおセリフなどの引用はマンガ版である五味（2019b）<sup>25</sup>からである。

さてミュウツウはコピーポケモンたちを引き連れ、「ピュアズロック」という秘境の地に隠れ住んでいた。その地にサトシとその仲間たち、さらにミュウツウを狙うロケット団が迫るところから物語は始まる。そんな中、意図せずピュアズロックに来てしまったオリジナルのピカチュウ（サトシのピカチュウ）に敵意をむき出しにするコピーのピカチュウを、ミュウツウは以下のように言って止める。

「コピーと本物のピカチュウに、もはや差などない」

「われわれはコピーのポケモンかもしれない。しかし今は本物と同じ、命あるポケモンだ」

かつてミュウとどちらが本物か争ったミュウツウであるが、本物か否かというこだわりは既に捨て去っているようだ。そして彼は「人間たちはわたしを生み出した親だ…」と述べ、ロケット団と戦うのではなく、逃げることを選択する。かつては自身を生み出した人間を恨んでいたミュウツウだが、この時点ではその恨みすら捨て去っているようである。

そんなミュウツウに、コピーのピカチュウはピュアズロックの外の世界で生きたいと訴え、ミュウツウの管理下から離脱する。ミュウツウにとっては「外の世界」はオリジナルのポケモンたちのものであったが、コピーのピカチュウとそれに従う者たちを止めるべきか悩んでもいた。

そんな中、サカキはミュウツウの仲間であるコピーポケモンたちを人質に、ミュウツウを操り人形にする鎧を装着するよう、彼に強要するのだった。仲間たちのために鎧を装着したミュウツウはその行動を支配され始め、助けに来た

---

<sup>24</sup> このコピーポケモンをつくる行為から、ミュウツウは出生主義＝natalismの思想を持っているととらえる読者もいるかもしれない。しかしこの出生主義を、反出生主義とは反対に「生まれてきてよかった」、「子どもを生み出していくべきだ」という思想だととらえるのであれば、ミュウツウに当てはまるかどうかは慎重な考察が必要だろう。少なくともミュウツウが直接的にもしくは積極的に「生まれてきてよかった」、「子どもを生み出していくべきだ」と述べた訳ではないからだ。この意味でミュウツウは反出生主義と出生主義のどちらにもなりうるアンビバレンスな存在ともいえる。

<sup>25</sup> こちらもページ数がないため、ページ数の記載を省略させていただく。

サトシに自身を殺すよう頼んだが、コピーのピカチュウの「生きることを諦めないで」という言葉によって考え直し、鎧の破壊を試みる。結果として鎧を破壊できたものの瀕死に陥ったミュウツーは、自身を助けようとするサトシに〈未だに自分が何者なのかわからない〉という心中を吐露する。しかしサトシの手でポケモンに生命力を与える泉に投げ込まれたミュウツーは、次のように察するのだった。

「この泉は、わたしの命を元通りにしてくれる。他の生きものにとってもそうであるならば…、わたしは少なくとも、この星に、生きていい生きものだ」

この時ミュウツーはついに、コピーもまたオリジナルと同様に、同じ世界（ピュアズロックの外の世界）で生きていいことに気づいたのであろう。かくして復活したミュウツーは泉をピュアズロックの地下に避難させ、ロケット団たちの記憶を奪うと、コピーポケモンたちと共にピュアズロックで隠れ住むのをやめるのだった。

以上が『我ココ』の概要であるが、ここではミュウツーが「だれが生めと頼んだ」などの「生まれてこなければよかった」という反出生主義思想に近づく考えを見せなくなっていることがわかる。そして彼にとって人間は親同然の存在であり、かつてのようにつくられたことへの恨みや憎しみも抱いていない。彼の悩みはコピーとして存在してしまっただけで、どう生きればよいか、自分は何者なのかという点に集中している。また彼は『逆襲』、『逆襲 EV』においてポケモンたちのコピーを自ら作成したことは先にも述べたが、『我ココ』ではさらにそのコピーたちが子どもを産んだことも描写されている。このことからミュウツーは「誕生させる行為は悪である」という意味での反出生主義思想も持ち合わせていないことがわかる。むしろ彼はコピーという生まれであっても、オリジナルと同様に「命ある者」として生きるべきとの答えに達している<sup>26</sup>。

以上のことから、ミュウツーの思想は「何故つくった！」という誕生に関する怨嗟ではあるが、必ずしもベネターの「誕生害悪論」のような「反出生主義」とは言えないことがわかる。しかし、それでもなおミュウツーの問いかけは多くの人々に「反出生主義」を感じさせているのも事実である<sup>27</sup>。そこで次章以降

---

<sup>26</sup> ミュウツーの「命ある者」として生きるべき」という答えを出生主義的にとらえることもできるかもしれない。しかしベネターや Kei といった反出生主義の思想を主張する者たちも、生まれてしまったからには生きた方がいいということには同意している。つまり「命ある者」として生きるべき」という答えからミュウツーを出生主義者と同定するのは早計であろう。

<sup>27</sup> 例えば「ミュウツー 反出生主義」で検索してヒットした Web ページの中には、「ミュウツーというのが反出生主義者であるらしい」といった形で、ミュウツーと反出生主義を結び付けて



ではさらに、彼や主要登場人物たちの言動から、『逆襲』シリーズのもつ思想を考察していこう。

## 5 ミュウツーたちの言葉とその思想的根源

### 5.1 「だれが生めと頼んだ」という恨み

「だれが生めと頼んだ」という恨みは、確かに反出生主義にもつながり得るものである。しかしミュウツーの場合はこの恨みはそのまま「人間」全体への憎しみに変わり、「逆襲」へと向かうことになる。つまるところミュウツーに関しては、「生まれてこなければよかった」という気持ちよりも、自分を生み出した存在である人間への憎しみの方が勝ったと考えることができる。我々人間でも「だれが生めと頼んだ」と考えた者が必ずしも皆、反出生主義者になる訳ではないだろうし、両親への憎しみの方が強い者もいるだろう。このように「だれが生めと頼んだ」という恨みが、反出生主義に至らないケースがあることは、別段おかしいことではない。

またミュウツーの「だれが生めと頼んだ」という恨みが、反出生主義に至らなかったという事実からは、何らかの「目標」や「目的」がある場合は、この恨みが反出生主義に至らないという可能性を見出すこともできる。つまりミュウツーは、人間への「逆襲」という目標、目的があるからこそ、「生まれてこなければよかった」という気持ちを深めることなくいられたのではないだろうか。

またミュウツーは自身と同じクローンのポケモンたちを大量に造り出している。〈人間でもポケモンでもない〉と評した自分と同じクローンを作ること、それはミュウツーにとって仲間を作ることであろう。この仲間という存在もまた、反出生主義にミュウツーが至らない理由の1つであると考えられる。なぜならミュウツーは「逆襲」を中止したあとも反出生主義に陥っていないからである。もしミュウツーに仲間がいなければ、「逆襲」という目的を失った彼に残るのは、「生まれてこなければよかった」という恨みだけであった可能性は十分にある。しかしミュウツーには「仲間」がおり、「仲間を守る」という目的があったのである。その目的が彼を反出生主義ではなく、「どう生きるか」という検討に導い

---

いるものがある [tsk id:tsk1024 (2020) 『ミュウツーの逆襲 EVOLUTION』同 (2019 - 2020) 「読んだもの観たもの」 <https://tsk1024.hatenablog.com/entry/2021/01/01/144900> (最終アクセス 2021年1月25日)]。また他にも、『逆襲 EV』について書かれたブログのハッシュタグに「反出生主義」が入っている Web ページもあった [how1about2you (2020) 「ミュウツーの逆襲 EVOLUTION」同 (2020 - 2021) 「もう生まれちゃったもんね」 <https://how1about2you.hatenablog.com/entry/2020/12/19/081400> (最終アクセス 2021年1月25日)]

たのではないだろうか。

これを通常の人間に当てはめて考えてみよう。「だれが生めと頼んだ」という憎しみが向かうのは通常両親ということになることは先にも述べた。そしてそのあとたどる道は大きく分けて3つあると考えられる。1つ目は一時的にそうした恨みや憎しみをもってもそれを乗り越えて生きていくパターン。2つ目はミュウツウのように両親への復讐のために生きるパターン。そして3つ目はそのどちらにもいたらず、生まれて来なければよかったという考えにとどまり、反出生主義思想を深めていくというパターンである。このように考えたとき、ミュウツウは当初こそ2のパターンに陥ったものの、サトシなどとの交流の果てに1に至ったと言える。

繰り返しになるが、ミュウツウが人間への「逆襲」を志さず、ただただ生まれてきたことを後悔していたのであれば、彼が反出生主義者になっていた可能性は十分にあり得る。つまりミュウツウは反出生主義者ではないものの、反出生主義に至る可能性のあった者なのである。そこに反出生主義者がミュウツウに惹かれ、ミュウツウを反出生主義者として扱う理由の1つがあると筆者は考えている。

## 5.2 ミュウツウはなぜ「逆襲」を中止したのか

先に筆者は、ミュウツウが逆襲という2のパターンから、憎しみを乗り越えて1のパターンへ移行したことを述べた。しかし一体なにがミュウツウをそうさせたのか、その心変わりは物語中で明示的には描かれていない。ここではその理由についてさらに考えてみたい。

最初に考えられるのは、自身の「親」である人間に対する価値観が変化したことである。ミュウツウが「逆襲」を志した時点で、彼が知っていた「人間」は2種類しかいなかった。1つは彼自身を作った科学者たち、もう1つは彼の力を利用しようとするサカキである。この2種類の間には一見すると共通点がないように見えるが、彼らの言動にはミュウツウに対する思いやりや愛の欠如という共通点がある。

まず科学者たちは、確かにミュウツウの誕生を喜んでいて、しかし彼らの会話をよく聞いてみると、「まさに科学の勝利」、「これで私たちの正しさが証明されたぞ」、「研究が続けられます」、「今すぐバージョンアップだ」と、「自分たちの成功に酔いしれている」<sup>28</sup>だけであり、誰もミュウツウ自身を見てはいなかったのである。生まれてすぐにこのような言葉だけを聞かされたミュウツウが、「ただ純粋に自分が生まれてきたこと自体を喜んでいてのではない」と感じた

---

<sup>28</sup> 水希 (2019) pp.23-24.

としても不思議ではないだろう。また彼らはミュウツアの疑問である〈何のために生まれたのか〉に答えることもなかった。ミュウツアのこの疑問に最初に答えたのは、もう 1 種類の間人であるサカキだ。しかし彼の答えは前述のとおり〈自分の道具になれ〉というものであり、ミュウツアが納得できるものではなかった。

以上のことから、科学者たちは自分たちの研究が成功したという功績“だけ”を、サカキはミュウツアが持つ圧倒的な力“だけ”を見ておりミュウツア自身を全く見ていないことは明らかだろう。このような存在しかいない環境では、ミュウツアの「基本的自尊感情」<sup>29</sup>は一向に育まれないままであり、そこにミュウツアを反出生主義に近い思想や逆襲に駆り立てた一因があると筆者は考えている。実際小説版『逆襲 EV』では、ミュウツアが人間に対する憎悪を膨らませた理由として以下のことが挙げられている。

誰もがミュウツアの誕生を喜んだ。

しかし、彼らが口にしたのは実験に成功した自分たちを称賛する言葉だけだった。

サカキも、ミュウツアを最強の兵器としてしか見ていなかった。人間につくられたポケモンだから、人間のために戦えと言ったのだ。それ以外に価値はないと——<sup>30</sup>。

しかし、逆襲作戦の途中で出会ったサトシは違った。サカキと同様ポケモンを戦わせることを生業とするポケモントレーナーであるにもかかわらず、ポケモン同士の戦いであるコピーとオリジナルの争いを、命を賭して止めようとしたのだ。それはミュウツアの知らない人間の姿だった。その衝撃はミュウツアの価値観を破壊し、彼に冷静な思考を取り戻させた。石化から解放されたサトシと、相棒のピカチュウが抱き合う姿を見てミュウツアが気づいたことを、小説版『逆襲 EV』は次のように述べている。

存在する理由がわからぬまま、人間を憎んで、本物であるミュウを憎んで、生きてきた。

けれど、憎む必要なんてなかったのかもしれない。

自分も、ミュウも、同じ生き物。この世に生を受けた、ポケモン同士。

---

<sup>29</sup> 近藤卓によれば「自分は生きていていいのだ。生まれてきてよかったのだ。これ以上でもこれ以下でもない自分は自分だ、といった感情」のことを基本的自尊感情という [近藤 (2014) p.5]。これはまさにミュウツアの求めた“答え”であり、反出生主義とは対立する感情といえよう。

<sup>30</sup> 水希 (2019) pp.35-36.

そこに優劣など、存在しないのだ——<sup>31</sup>。

このことからミュウツーが欲していたのは、〈誰かより優れていなくても、あなたはそこにいていい〉という承認であったと考えられる。ミュウツーはこの承認を、サトシの行動から感じ取ったのである。

ここにミュウツーに人々が共感する理由があると考えられる。ミュウツーとは、幼い頃から承認欲求を満たされずに育った大人のメタファーなのである。ミュウツーは「私はただそこにいてだけでいい、そこにいてだけで意味や価値がある」という形での承認欲求を満たされず、基本的自尊感情の育たなかったために、いびつな大人になってしまった者、今そうなり得るように育てられている子どもたちそのものなのである。

「生まれてこなければよかった」という嘆きには、「ここにいていいのか」という承認欲求や疑問も含まれていると考えられる。少なくともミュウツーはこの2つの嘆きを持っていた。「生まれてこなければよかった」、「ここにいていいのか」という嘆きに共感した反出生主義思想を持つ者は、そこに自分たちと同じものを感じても不思議ではない。このミュウツーの嘆きのインパクトの強さが、ミュウツーを反出生主義者であると感じさせるゆえんでもあろう。

また、ミュウツーの問いが普遍的なものであることも、我々がミュウツーに共感する理由の1つとなり得るだろう。彼が言う「私は誰だ」＝「私は何者なのか」という問いは歴史上たびたび登場しているものだからだ。例えばポール・ゴーギャンの有名な絵のタイトルは「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」(原題 *D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?*) である。しかしこの問いの初出はゴーギャンではなく、さらにさかのぼっていくとグノーシス主義の資料<sup>32</sup>や、1世紀の詩人ペルシウスの風刺詩の中にも登場する<sup>33</sup>。このように「私は誰だ」という問いは古くから、たびたび我々の間で浮かびあがってきた問いなのである。

またミュウツーの「わたしはなんのために、生まれてきた」という問いやど

---

<sup>31</sup> 同 p.184.

<sup>32</sup> ウァレンティノス派グノーシス主義者テオドトス(140年～160年頃活動)は、「われわれはいかなる存在であったか」を、「いかなるものと成ったのか」、「われわれは何処にいたのか」、「何処に投げ込まれたのか」、「われわれは何処に向かっているのか」、「何処から贖われたのか」、「誕生とは何であるか」、「再生とは何であるか」に関する覚知と並んで、「自由にする力を持つもの」としている[アレクサンドリアのクレメンス(2015秋山学全訳)「アレクサンドリアのクレメンス『テオドトスからの抜粋』』『文藝言語研究』68,p.59]。ここでは詳細を検討することはできないが、グノーシス主義は反出生主義の問いも発している(たとえば森岡(2020b) pp.42-43参照)。また今後各グノーシス主義の資料における反出生主義思想についても詳細に分析していく必要があると筆者は考えているため、また別稿で検討したい。

<sup>33</sup> 筒井(2004) pp.31-36.

んな風に生きていけばよいのかという苦悩は、多くの子どもたちが体験する「いのちの体験」とも類似している。近藤卓によれば、小学校中学年から中学生にかけての子どもは「なぜ生まれてきたのか、なぜ生きているのか、これから先どうなっていくのか、そもそも生きるとはどういうことなのか、死んだらどうなるのか」といった問いを体験している場合が多いという<sup>34</sup>。この体験を近藤は「いのちの体験」と呼んでいるのだが、その問いの内容はこれまで見て来た、『逆襲』から『我ココ』にかけてのミュウツウの問いと良く似ている。つまりミュウツウの問いの1つ1つを、我々もまた自分の問いとして考えている、もしくは考えたことがあり、それがミュウツウへの感情移入を加速させているのである。

### 5.3 「いるからいる」——反出生主義と誕生肯定の狭間で——

「なぜここにいるのか」という問いに対する答えである「いるからいる」というセリフは、先に述べたようにミュウツウの力によって記憶を失ったカスミの口から発せられたものである。ここで記憶を失うことは誕生の比喻であり<sup>35</sup>、「なぜここにいるのか」と問うたミュウツウと同じ生まれたままの状態で、「いるからいる」と発言していると考えることができる。

つまりミュウツウと同じ（もしくは近い）状態に陥ってもなおカスミは、「いるからいる」という単純明快な答えに落ち着いているのである。この言葉はささやかな、誰にでも言えそうな言葉であるが、その破壊力は計り知れない。使い方によってはミュウツウの「逆襲の思想」のみならず、反出生主義をも揺るがし、誕生肯定を導く可能性もある。

「いるからいる」。この言葉が内包する意味の1つは、誕生肯定、存在肯定である。実際『逆襲』や『逆襲 EV』を観た視聴者はそういうメッセージを受け取っている<sup>36</sup>。つまりこの言葉は、ミュウツウが、そしてミュウツウに自分を重ね

<sup>34</sup> 近藤（2020）p.132.

<sup>35</sup> 例えばプラトンの『国家』の末尾に収録されている「エルの物語」（第10巻 614B-621D）では、生まれ変わりについて語られているが、それによると死後魂は生まれ変わる前に「〈放念（アメレース）の河〉の水を飲んで記憶を失うとされている〔プラトン（1979 藤沢令夫訳）『国家（下）』岩波文庫 pp.416-417〕。これに従ってこの『逆襲』の場面を見ると、ミュウツウによる記憶抹消は生まれ変わり＝再誕のメタファーであるととらえることが可能となるのである。

<sup>36</sup> 「なぜなら、「ミュウツウの逆襲」のテーマって「いるんだからいるんだよ」という全ての存在を肯定する存在論なんですよ」ナガ（2019）「【ネタバレあり】『ミュウツウの逆襲 EVOLUTION』感想・解説：何のためにこのリメイクを作った？」同「ナガの映画の果てまで」<https://www.club-typhoon.com/archives/2019/07/07/mewtwo-evolution.html>（2020年12月8日最終アクセス）

「さあ、いるんだから、いるんでしょね」この一言に、どんなに救われたか、どんなに存在の全てを肯定してもらったか。存在することに、理由なんて求めなくてもいいんだよ。ただそ

た人たちが求めていた「自己承認」なのである。基本的自尊感情は、〇〇ができるから褒めてもらえる、存在を認めてもらえるという状況では満たされない。何かができるから、役に立つからではなく、「いるからいる」と認めてもらわねばならないのである<sup>37</sup>。ここに我々が求めたものがある。

さらに「いるからいる」という言葉は、ベネターの誕生害悪論の足りない部分を埋める役割もある。もしもこの世で生きることが苦痛であり、生まれてくることが害悪であるのならば、現に生まれてきてしまった「私」はどうすればよいのだろうか。「私」はなぜ生まれてしまったのか。この問いにベネターの論理では答えることは難しい。しかし「いるからいる」という言葉は、この「なぜ生まれてしまったのか」という絶望に、〈存在してもいい〉という承認を与えてくれる。この意味で「いるからいる」という言葉は誕生害悪論の欠点を補強しうる。

しかし「いるからいる」では、まだ生まれていない命を肯定することは難しい。「いるからいる」はまだいない命についてはなにも言えないからだ。しかしそれでもなお、誕生は害悪であるという考え自身は破壊しうる。誕生が害悪なのは、この生が苦痛にまみれているからだ。そしてその苦痛は「私」に「どうして生まれてきてしまったんだ！」という嘆きをもたらす。この言葉は先にも述べたように、承認されない苦痛から生まれてきている場合もある。その場合、「いるからいる」は、そもそも反出生主義の出発点である「どうして生まれてきてしまったんだ！」を「いるからいる」と承認し、無力化しうる。その意味において、この言葉は反出生主義を無力化するものでもある。

とはいえ「いるからいる」という言葉は苦痛をすべて消すわけではない。あくまでも承認欲求からくる苦痛に関してのみ有効なものだ。人生には生老病死、四苦八苦いくらでも苦痛がある。そう考えるとやはり我々は生まれてこない方がいいのかもしれない。しかし我々は、生まれてこなければよかったと嘆く人に「そうだね」と同意するだけでよいのだろうか。

---

こにいるから、私たちはそこにいるんだよね。そこにいるためだけに、私たちはそこにいるんだよね。まるで「ここにいてもいいんだよ」と言ってもらえたようで、思わず画面越しに涙がこぼれたセリフです」No Name (2019)「「さあ、いるんだから、いるんでしょうね」」「pixiv」  
<https://www.pixiv.net/artworks/75831965> (2020年12月8日最終アクセス)

<sup>37</sup> なお何かができる際に存在を認めてもらえることで育まれるものとしては社会的自尊感情がある。こちらは基本的自尊感情に比べると脆く、その何かができなくなった際に簡単に壊れてしまう自尊感情である。基本的自尊感情が低く、社会的自尊感情のみが高い者も反出生主義に陥る可能性があるとして筆者は考えている。例えば森岡は「成績が良かったら愛してあげる」という条件付けをされて育ったことをある対談の中で告白している。そしてそれは「もし自分がいい成績を取れなくなったら自分は愛を与えられる価値がない存在だ」と思い、それがさらに進んで「こんな私だったら生まれたいほうが良かった」という気持ちに陥る呪いだとして述べている〔戸谷、森岡(2019) p.9〕。この事例はまさに基本的自尊感情が育まれずに社会的自尊感情のみが育まれた場合に、ミュウツーやひいては反出生主義に近づく気持ちを持つことを示していると言えよう。

最後にこの「生まれてこなければよかった」という詠嘆についてもう少し考えてみたい。「生まれてこなければよかった」という詠嘆は、「死にたい」という詠嘆と似ている部分がある。どちらも今の自分という存在を否定し、無くしてしまいたいと思っている点では同種と言えよう。しかしこうした詠嘆は本当に、自分が存在しない状態を望んで口にされているのだろうか。ここは慎重に検討されなければならない。これらの詠嘆は〈生まれてこなければよかったと思うくらい苦しい〉、〈死にたいほど苦しい〉という嘆きの「苦しい」という部分を省略して言われている可能性がある。苦しいと言っている人に我々ができることは「そうだね」と同意することだけではない。その苦痛の原因を特定し、その苦痛を消滅もしくは緩和することもある程度は可能であろう。

もちろんすべての苦痛を取り去ろうとする行為は、『すばらしい新世界』の中で描かれたようなディストピアをもたらすかもしれない<sup>38</sup>。また苦痛がすべてなくなっても、反出生主義は消滅しない可能性もある<sup>39</sup>。しかし「生まれてこなければよかった」とどれだけ願ったとしても、「私」という存在が消えてなくなるわけではない。ならば我々はミュウツーがそうしたように、またかつてゴータマ・ブッダが行ったように<sup>40</sup>、「どう生きればよいか」、また「生まれてこなければよかった」と嘆く人に対してどうしていけばよいかをこそ考える必要があるのである。

このことを踏まえて、「誕生させる行為は悪である」という点も改めて考えてみよう。反出生主義者は、この世は苦痛でいっぱいであるということを前提に、

---

<sup>38</sup> 『すばらしい新世界』で描かれる未来世界では、①「人間の工場生産と条件付け教育」、②「フリーセックスの奨励」、③「快楽薬の配給」によって、表面上不満のない生活を送っている[オルダス・ハクスリー(1932=2013 黒原敏行訳)『すばらしい新世界』光文社古典新訳文庫]。この小説の設定は反出生主義者を考える上で重要なものであると筆者は考えている。①が行われることによって、我々は「生まれてこなければよかった」などとは考えないように作られている可能性がある。また人間は労力として生産するものなので、生む生まないの議論も存在していない。また②においては、避妊が義務付けられているので、ある意味で反出生主義と親和性がある。そして仮に、生まれてきたことや生み出すことに疑問をもったとしても③の快楽薬という副作用のない麻薬によってそんな考えは忘れることができる。つまりこの「すばらしい新世界」は、苦痛も反出生主義も理論上存在しない世界の可能性がある。しかしこの世界をユートピアとするかディストピアとするかは判断のわかれるところである。

<sup>39</sup> 例えば森岡は牧内からのインタビューの中で、「もし魔法のようなものでその人が抱える外的要因が全部解決したとする。そうしたら「生まれてこなければよかった」とか、「子どもを産まない」とか思わなくなるのかといえ、そうではない」と指摘している[牧内(2020)]。この指摘にもあるように、苦しみを無くすことがすべての反出生主義を駆逐することになるとは筆者も考えていない。しかし苦しみが減ることで、ミュウツーのように反出生主義に向かわなくなる存在も少なからずいるのではないかと考えている。

<sup>40</sup> 森岡はベネターなどの反出生主義に欠けている「実践」部分が、ブッダにおいては「出家システム」という形で存在していることを指摘している。ブッダは「生まれてこなければよかった」という気持ちすら苦しみとして乗り越え、「どう生きればいいのか」を探求しているのである[森岡(2020b) pp.191-195]。

子どもを苦痛のある世界に生み出すことを否定する。しかしこの主張は、必ずしも出産の全否定にはつながらないはずである。もしもこの世から苦痛を完全に、もしくはある程度消すことができるのであれば、彼らも子どもを生んでもいいと思えるようになるかもしれない。つまりところ立岩真也が、安楽死・尊厳死を安易にさせるのではなく、苦痛を減らすべきだ、減らせると主張しているように<sup>41</sup>、我々は苦痛の世界に子どもを生まないと決めるのではなく、子どもが生めるように苦痛のある世界を変えていくことこそが必要なのである<sup>42</sup>。

## 6 おわりに

ここまでの議論を総括しよう。まずミュウツーは反出生主義者ではなかった。しかし彼は反出生主義に近い思想と、我々に強い共感をもたらす思想をもっていた。例えば「だれが生めと頼んだ」という叫びは、確かに反出生主義につながり得るもので、我々も共感しやすいものであった。しかしこの叫びは、目的・目標によっては反出生主義に向かわないこともあり、ミュウツーは「逆襲」のため、そして仲間のため反出生主義には至らなかった。

ではなぜミュウツーは大事な目的・目標である「逆襲」を中止したのだろうか。それは彼が「逆襲」を決意したのが、人間から基本的自尊感情を育てるための自己承認を与えてもらえなかったことと大きく関連していた。ミュウツーはサトシの行動から、人間を見直し、自己を承認してもらえる可能性を感じ取ったのである。人間が自分を承認してくれる存在であるため、ミュウツーは人間への「逆襲」を中止したのだ。

この「存在の承認」という特徴は、「いるからいる」という言葉にも端的に表されていた。この言葉は、ミュウツー及びミュウツーに自分を重ねた（基本的自尊感情の低い可能性のある）人たちが求めていた「自己承認」を与えてくれ

---

<sup>41</sup> 立岩 (2008)。

<sup>42</sup> なお「誕生させる行為は悪である」という理論には他にも、子どもの同意がないため誕生させるべきではないとの考え（子どもの同意不在論）も含まれている。例えば Kei は「生を与えることは親による一種のギャンブルであり、しかも結果の影響を受けるものは、同意していない子供であるという不公平なもの」で、「子供自身が（たとえどれだけ恵まれていようと）本当に生まれてきてよかったと思うかどうかは、誰も確信をもって言うことは出来ません」と主張し、「例え結果論として子供が（人生のある時点で）生まれて良かったと思っても、その行為自体は正当化されるものではないのです」としている [Kei (2020)]。子どもの同意不在論をこのようなものとしてとらえるなら、少なくとも理論上はこの世での苦痛が仮に 0 にできるのであれば、子どもの同意がなくても誕生させる行為が容認される可能性はある。また確かに子どもが誕生することに同意したかどうかを確認する術はないが、同時に同意していなかったことを確認する術もないということもできる。もし輪廻転生があるとすれば、我々は「生まれ変わりたい」と思ってこの世に生まれてきた可能性もある。このような輪廻転生をポジティブにとらえる現代的思想と反出生主義の関係は、個々人の思想や信仰と反出生主義が関わる重要な視点と考えられるので、また別稿で詳細に検討したい。



る。それはつまり、「誕生してしまった私の全肯定」である。これは使い方によっては誕生害悪論を補強し、場合によっては破壊する炸裂弾のような威力を持つものであった。

しかし「いるからいる」をもってしても、生きることの苦しみをすべて消すことは難しく、やはりこの世に生まれてくるべきではない＝生むべきではないという思想は残り得る。それでも我々は「生まれてこなければよかった」という叫びをただそのまま鵜呑みにすれば良いわけではない。我々はその叫びの裏にある「この苦しみがなければよかったのに」という叫びを見逃すべきではないのである。我々は「生まれてこなければよかった」と叫ぶ人の苦しみに寄り添い、苦しみを減らす努力を続けなければならない。これが『逆襲』及び『逆襲 EV』、『我ココ』を考察した上での、本論文のひとまずの結論である。

本論文では、「生まれてこなければよかった」と叫ぶ人の苦しみとはいったいどのようなものであるかについては、基本的自尊感情の問題からしか見ることができなかった。他のあまたある苦痛に関しては、また別の機会により詳細に論じる必要があるため、今後の課題としたい。

## 文献一覧

Kei Singleton (2020=2017)「アンチナタリズム入門 ～わかりやすいアンチナタリズムの解説～アンチナタリズムとは何であり、何でないのか」『The Real Argument Blog』

<http://therealarg.blogspot.com/2017/12/introduction-to-antinatalism.html>

(最終アクセス 2021 年 1 月 25 日)。

五味まちと (2019a)『ミュウツターの逆襲 EVOLUTION』小学館。

五味まちと (2019b)『ミュウツター！ 我ハココニ在リ』小学館。

近藤卓 (2007)「心理社会的発達段階といのちの認識の発達」近藤卓編『いのちの教育の理論と実践』金子書房、15-22 頁。

近藤卓 (2014)「基本的自尊感情・社会的自尊感情と共有体験」近藤卓編著『基本的自尊感情を育てるいのちの教育——共有体験を軸にした理論と実践』金子書房、2-22 頁。

近藤卓 (2020)『誰も気づかなかった子育て心理学 基本的自尊感情を育む』金子書房。

田尻智原案、石原恒和監修 (2006)『ミュウツターの逆襲 ルギア爆誕』小学館。

立岩真也 (2008)『良い死』筑摩書房。

筒井賢治 (2004)『グノーシス 古代キリスト教の〈異端思想〉』講談社選書メ

チエ。

戸谷洋志、森岡正博（2019）「生きることの意味を問う哲学」『現代思想』2019年11月号、8-19頁。

仲藤里美 2021a 「香山リカ×森岡正博「反出生主義」対談（前編）～私たちは「生まれてこないほうがよかった」のだろうか？」イミダス・集英社「情報・知識&オピニオン imidas」<https://imidas.jp/jjikaitai/l-40-282-21-01-g320>（最終アクセス 2021年1月30日）。

仲藤里美 2021b 「香山リカ×森岡正博「反出生主義」対談（後編）～コロナ禍で直面させられた「生きる意味」に向かって」イミダス・集英社「情報・知識&オピニオン imidas」<https://imidas.jp/jjikaitai/l-40-281-21-01-g320>（最終アクセス 2021年1月30日）。

ペイゲルス、エレヌ（1979=1982 荒井献、湯本和子訳）『ナグ・ハマディ写本 初期キリスト教の正統と異端』白水社。

ベネター、デイヴィッド（2006=2017 小島和男、田村宣義訳）『生まれてこない方が良かった——存在してしまうことの害悪』すずさわ書店。

牧内昇平（2020）「私たちは「生まれてこないほうが良かったのか？」哲学者・森岡正博氏が「反出生主義」を新著で扱う理由」『BUSINESS INSIDER』<https://www.businessinsider.jp/post-222520>（2020年12月31日最終アクセス）。

水希しま（2019）『ミュウツウの逆襲 EVOLUTION』小学館。

森岡正博（2020a）「リヴカ・ワインバーグの出産許容性原理について — 生命の哲学の構築に向けて（11）」『現代生命哲学研究』第9号、80-88頁。

森岡正博（2020b）『生まれてこないほうがよかったのか？ 生命の哲学へ！』筑摩選書。

森岡正博（2021）「「反出生主義の定義とカテゴリー」 Ver.4.0」

<https://twitter.com/Sukuitohananka/status/1351816906324406273>（最終アクセス 2021年1月25日）。

吉本陵（2014）「人類の絶滅は道徳に適うか？：デイヴィッド・ベネターの「誕生害悪論」とハンス・ヨーナスの倫理思想」『現代生命哲学研究』第3号、50-68頁。